

近代文学研究叢書

第五卷

昭和32年2月10日 印刷
昭和32年2月20日 発行
昭和47年3月1日 二刷出版

[¥ 2500]

著者	発行者	印刷者	発行所
昭和女子大学近代文学研究室	東京都世田谷区太子堂一〇七 小林寅次	東京都千代田区神田錦町三丁目一番地 梶原忠幸	東京都世田谷区太子堂一〇七 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座東京一七〇八六七 電話(42)五一三一〇八番

近代文学研究叢書

第 五 卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

池 石 上 荻 太 片 金 木 坂 笹 山 島 玉 辻 内 成 人 保

田 森 井 原 田 桐 子 俣 本 澤 宮 田 井 村 藤 瀬 見 坂
龜 延 磯 井 三 顯 健 美 謹 幸 圓 正

鑑 男 吉 水 郎 智 二 修 郎 明 允 二 助 鑑 濯 勝 吉 都

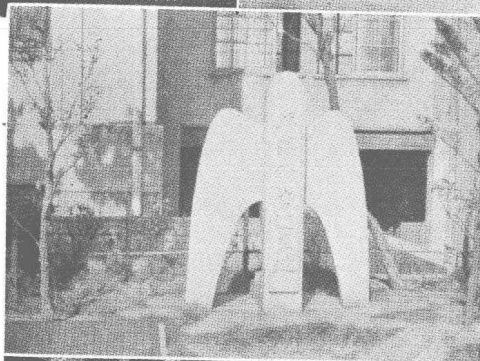
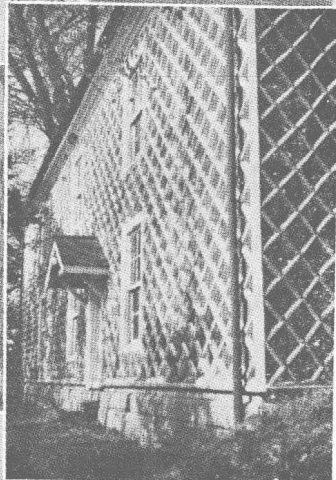
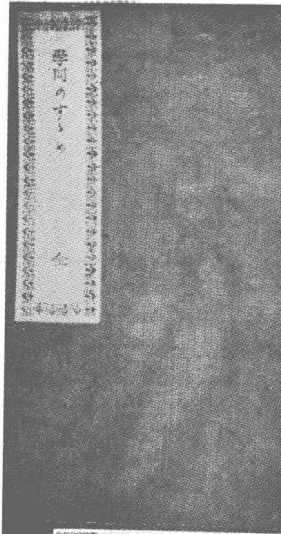
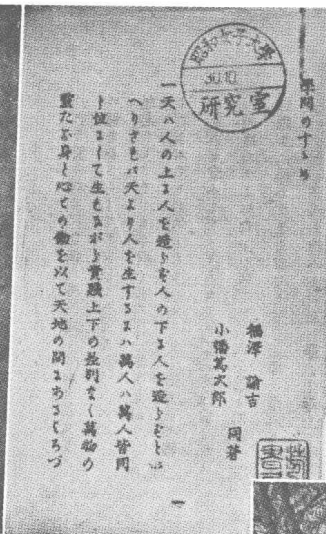
(国文学) (児童文学) (英語学) (俳文学) (比較文学) (和歌文学) (英文学) (和歌文学) (英文学) (独文学) (英文学) (比較文学) (国文学) (英文学) (仏文学) (近代文学) (近代文学) (国文学)

口 絵 写 真

ハ	中	大	福	カ	ビ
	江	橋	澤	ツ	ア
ウ	兆	乙	諭	ク	ソ
				ラ	
ス	民	羽	吉	ン	ン

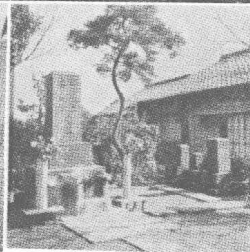
福澤諭吉 ①

慶応義塾大学構内
にある諭吉の胸像

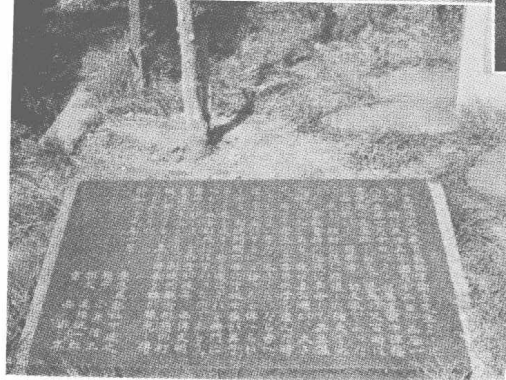


↑「学問のすゝめ」初版、明治四年十二月刊
(昭和女子大学蔵)残存五部の中の一という。

慶応義塾大学構内にある演説館
明治八年一月建立、東京都史蹟指定

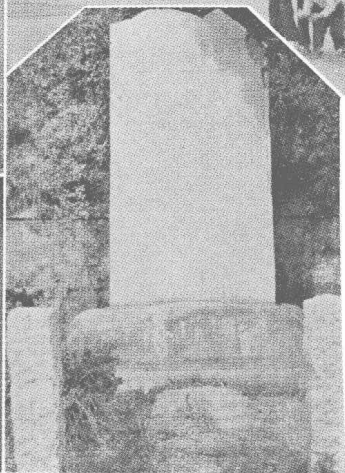
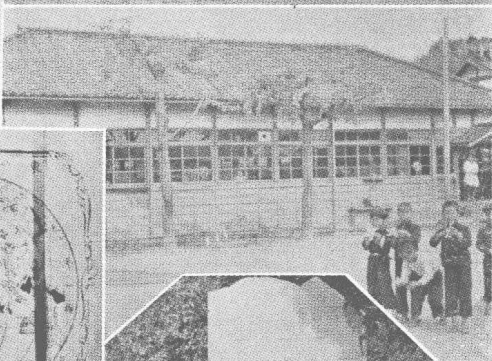
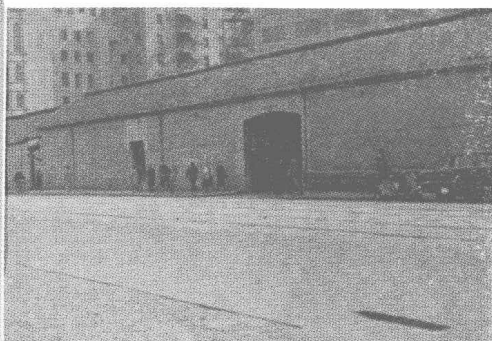


東京都品川区大崎の常光寺
にある諭吉の墓

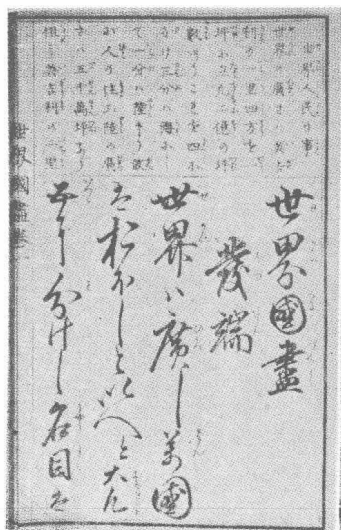


大阪大学医学部にある諭吉誕生地記
念碑。上が記念碑で下がその碑文。

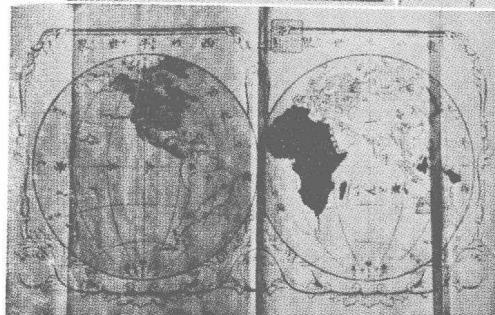
現存の中津藩大阪蔵屋敷の一部。現在は三井倉庫。



千葉県印旛郡豊住村長沼の長沼小学校分校
諭吉の寄附によるもの。
下は長沼事件の記念碑(大正七年三月二十九日建立)



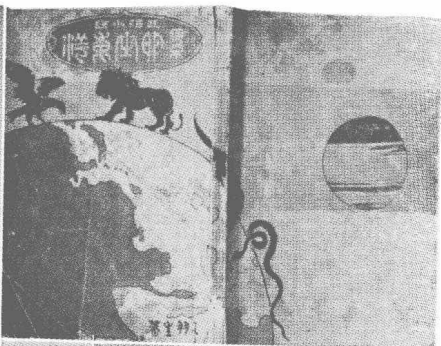
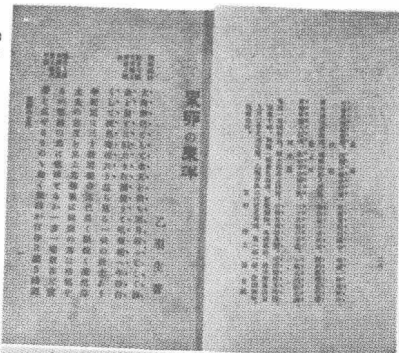
「世界國畫」——明治四年十二月刊(昭和女子大学蔵)
上は同書第一頁 下は巻頭にある地図。



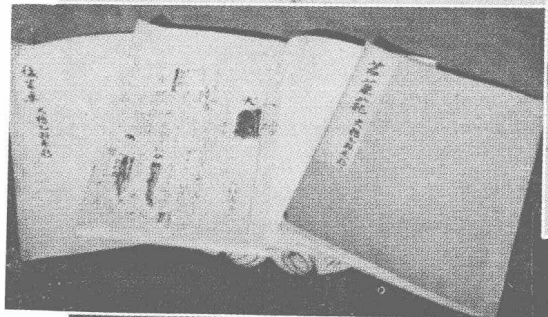
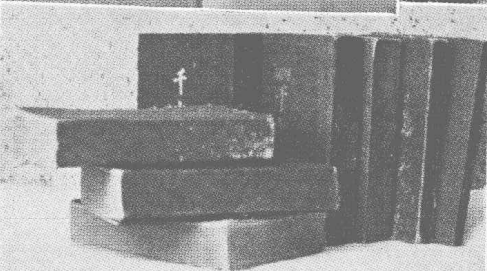
諭吉三男 三八氏(明治十四年生)

大橋乙羽

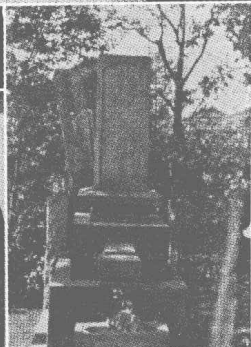
「累卵の東洋」——明治三十一年十一月刊
(昭和女子大学蔵)



「千山萬水」——明治三十二年一月刊
(昭和女子大学蔵)



「欧山米水」——明治三十三年十二月刊
(昭和女子大学蔵)



乙羽の墓（東京都荒川区日暮里町・養福寺）遺族（向って右から子息佐太郎氏、同夫人、孫一弘氏）

自筆の小説短篇集草稿
(大橋佐太郎氏蔵)



中江兆民 ①

兆民の肖像（フランス留学中）



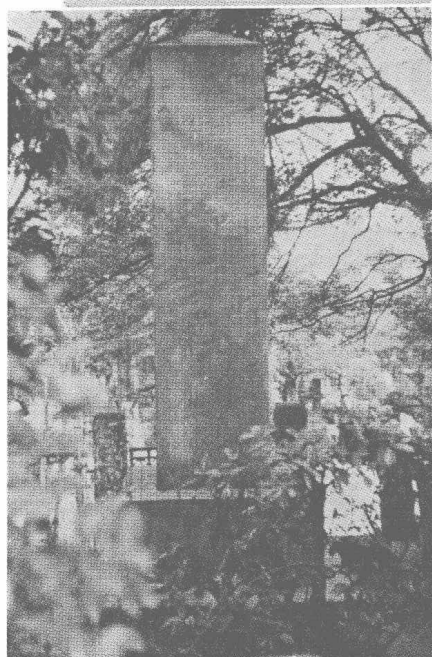
「警世放言」——明治三十五年五月刊

（昭和女子大学蔵）



「太陽」記念増刊 明治名著集——明治四十年六月

（昭和女子大学蔵）



中江兆民遺稿
警世放言
東京 松邑三松堂

東京都港区青山墓地内の
植木枝盛之墓の碑文

「一年有半」—明治三十四年九月刊
「續一年有半」—明治三十四年十一月刊

中
江
兆
民

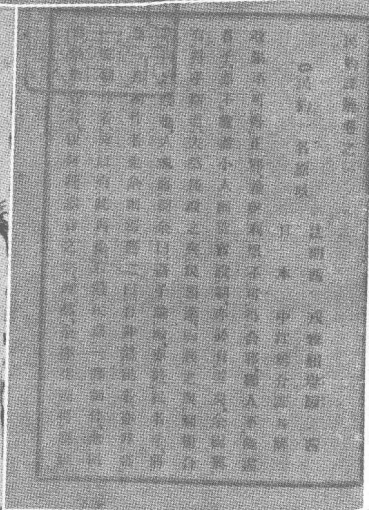
(昭和女子大学蔵)

②

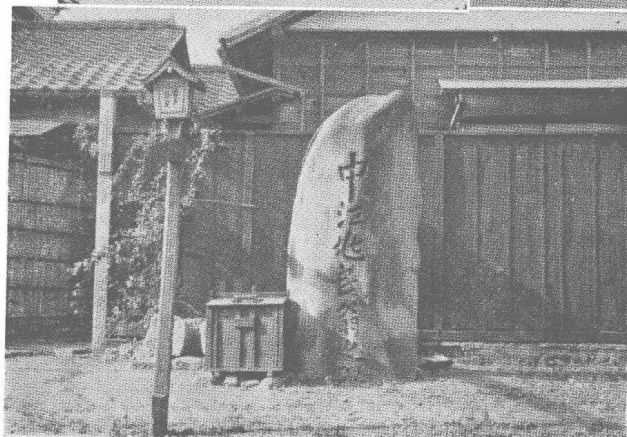
「民約譯解」—明治十五年十月刊
(上野図書館蔵)



「維氏美學」—明治十六年十一月刊 (昭和女子大学蔵)



「四民之目醒」—明治二十五年五月刊 (昭和女子大学蔵)

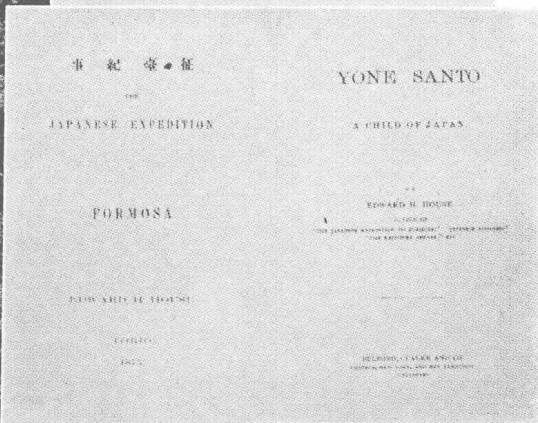
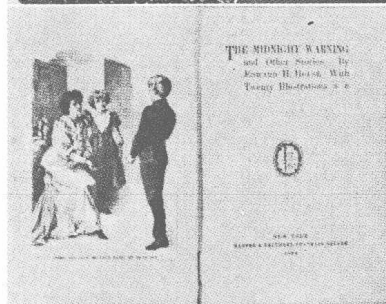
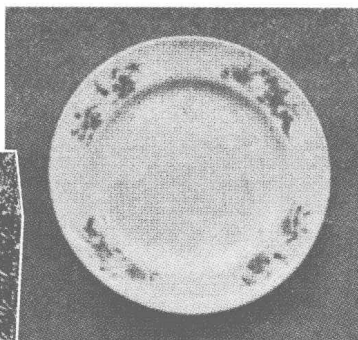


東京都江東区
亀戸天神境内の碑

E. H. ハ ウ ス

来日当時のハウス
「トーキョー・タイムズ」第一巻第一号明治一〇年一月六日
(東洋文庫蔵)

（ハウス愛用の皿）
（黒田正夫氏蔵）
昭憲皇太后から賜
わられた御蓋の表
は、遠く子金、人
をさる端かくし
で、小きわの風
（黒田正夫氏蔵）



「征臺紀行」明治八年
東京版（東洋文庫蔵）

“Yone Santo” 一八八八年
アメリカ版（東洋文庫蔵）

“The Midnight Warning” 一八九二年
ニューヨーク版（東洋文庫蔵）
東京都田端の大
龍寺にある墓

目次

口 絵

第五卷の成立……………昭和女子大学 近代文学研究室…(二三)

凡 例……………昭和女子大学 編集 寮…(一四)

L・H・ピアソン……………(一七)

福 澤 諭 吉……………(一七)

G・カックラン……………(二四)

大 橋 乙 羽……………(二七)

中 江 兆 民……………(三七)

E・H・ハウス……………(三九)

第五卷の成立

本巻は明治三十二年十一月から同三十四年十二月の間に歿した左記六人の研究と調査を収めることになった。

ピアソン夫人は、米国婦人一致外国伝道協会から派遣されて、切支丹禁制のきびしい明治四年六月、横浜に上陸した婦人宣教師である。夫と愛児三人をうしない、老母一人を残して来日してから明治三十二年死に至る二十八年間に一度も帰米することもなく、「熱誠火の如く、伝道心に充ち」て、女子教育に、伝道に全身をささげつくした。上陸二カ月にして早くも横浜に「亜米利加婦人教授所」を創立し、身のまわり品、衣服などを売って資金にあて、或は中村正直の協力を得、また間諜正木護につけねらわれたりしたが、ついに現在の横浜共立学園並びに共立女子聖書学院の基礎を樹立した。わが女子教育の功績は大きい。

福澤諭吉は云うまでもなく、十九世紀から二十世紀にかけての巨人で、英米流の功利主義思想による学問、政治、経済各界の先覚者であり、かつ指導者で、文明開化の演出家とも言うべき人であった。封建思想や、官僚主義に批判を加え、終始在野の達人として操守するところ堅く、慶応義塾を創立して幾多の人材を輩出せしめたが、福澤思想とその文体は明治初期文学に大きな影響を与えたものである。

カックランは日本最初のカナダメソジスト派の宣教師で、中村正直の知遇を得、同人社に居住し、英語と聖

書を講義して多くの秀れた宗教家を養成した。特に「旧約の神学」に関する造詣は深く、精彩ある講義で青年に大きな感化を与えたのみでなく東洋英和学校の創立者でもある。在日十五年のち日本で死去した。

大橋乙羽はその美文を以て、当時の読書層に対し文学意識を目ざめさせ、紀行文、写真版等によつて各地の風俗人情や山容水態を伝えて当時の人々に自然鑑賞、風土観を育成した。博文館支配人として出版による啓蒙事業を総攬し、雑誌編集の活路を開拓しつつ多くの文士を世におくり出した。

中江兆民はいち早くフランスの民権思想を伝えて時の青年に政治や社会問題について反省を促し、美学を移入して審美観を育成し、その他多くの翻訳、政治論、文明批評等によつて唯物観の移植につとめた。殊に「民約譯解」、「維氏美学」の紹介と「一年有半」、「續一年有半」の二著は彼の人間とその思想とを赤裸につたえた好著である。

E・H・ハウスは新聞記者として来日、ふかく日本を愛し、欧米との外交交渉で日本が不利を招くようなときなどは彼の正義感と日本愛は黙止できず、ついに破邪顯正の筆をふるって、内外に日本の正当を論じて交渉を有利に導いたことも一再にとどまらなかった。彼は日本の一女性を養女とし、これをモデルにして抒情的な美しい小説も書いた。日本を心から愛した外人として、小泉八雲を偲ばせるものがあつた。

本巻には中島湘煙、西村茂樹、正岡子規をも収める予定であつたが、福澤諭吉の著作年表と資料年表があまりに多く百五十頁をこえたので止むなく第六巻に譲ることになった。

研究室

(昭和三十二年一月二十日 昭和女子大学近代文学

凡 例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで凡そ二十二年を要しているので、指導者中で、岡田哲蔵、福井久蔵二翁は既に鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさぞおよろこび下さるであらう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歲月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の協力を感謝する。

四、年表で、著作というのは発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献をさすのである。従って死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中で編集ものは、所要の小題を書題名欄に、書名

と発行所を誌紙名欄に、該小題の執筆者を筆者欄に掲げることとする。

五、年表の末尾に追込んだ分は氏名のみが引用されている場合が多い。資料の価値は研究の分野、方向又は時代によつて移動するものであるから、できるだけ取捨をさける方針にしたが、紙面の都合で割愛の止むなき場合がないとも限らない。

六、各稿の末尾に「採訪」と「参考文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表すると同時に資料の出所、起稿や修訂に當つて参考した文献書目を記して、その依拠を明らかにした。ために研究資料の所在表示を旨とする「資料年表」と一部重複することがある。なお採訪した人の記名は年齢（推定）順、文献の記載も発表年次順にした。

七、引用文はすべて原文に従い、外国文の場合は訳文を添付するが、通読に便するため時に大意を用いることもある。なお原文中の誤りや疑わしい箇所は右側に（ママ）と記入し、又、異本（或る本）を示す場合も同様（イ）と記入する。

八、外国の国名、地名、人名は片仮名を原則とし、倫敦、桑港のように慣用久しいものでも、逐次片仮名に改めるつもりである。但し、すでに日本語化しているものはこの限りでない。

九、邦人氏名は旧漢字を用い見出しに振りがなをつけ、外人名の初出は原語を付し以下片仮名を用いる。

一〇、年代は日本年号と西暦とを適宜織りまぜて、どちらからでも検索できるようにした。年齢は満年齢を採用したが、場合によっては数え年何歳とすることもある。

（昭和三十二年一月二十日、昭和女子大学編集室）